ISSN 0287-0584

教育相談研究

第54巻

2017年

原　著

上野智江
安藤智子：養育行動が幼児の行動と親の精神的健康に与える影響……1

藤原健志
村上達也
相川充：小学生を対象とした感謝経験の筆記による
ポジティブ・ネガティブ感情の変化……15

資　料

日野雅子
熊谷恵子：発達障害のある生徒の保護者が持つ学校での
配慮・支援ニーズに関する研究……25
―学力重点校に在籍する生徒の保護者への面接調査―

報　告……37

筑波大学大学院人間総合科学研究科生涯発達専攻カウンセリングコース
筑波大学心理・発達教育相談室

Bulletin of Counseling and School Psychology
2017, Vol.54, 1－13

原　著

養育行動が幼児の行動と親の精神的健康に与える影響

元筑波大学大学院人間総合科学研究科　上野智江
筑波大学人間系　安藤智子

The influence of parenting behavior on the behavior and self-regulation of pre-school children and on the mental health of their parents

Ueno Tomoe (Former Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, *Bunkyo-ku, Tokyo, 112-0012*)
Ando Satoko (University of Tsukuba, Faculty of Human Sciences, *Bunkyo-ku, Tokyo, 112-0012*)

This study investigated parenting behaviors and examined the influence of parenting behaviors on children's behaviors and on parents' mental health. We conducted a survey with parents of pre-school children aged 2 to 6 who were enrolled at a kindergarten or a nursery located in Tokyo. We performed analyses based on the responses of 185 valid respondents. Factor analysis was performed on a parenting behavior scale and four factors were extracted: "responsive reaction," "control by material reward," "control by punishment," and "weak reaction." Path analysis showed that (1) "responsive reaction" parenting behaviors resulted in increased feelings of affirmation towards parenting. (2) "Control by punishment" parenting behaviors resulted in decreased "positive feelings toward child-rearing" and higher child-rearing anxiety and depression in parents. In addition, a high frequency of worrisome behaviors by children led to increased feelings of parenting-related burden. (3) More "weak reaction" parenting behaviors resulted in decreased self-control in children and increased parenting-related anxiety and depression in parents

Keywords: parenting behavior, child behavior, child self-regulation, parenting stress, parenting-related anxiety, depression

問題と目的

はじめに

子どもの健やかな発達を促進することは，子どもや親だけではなく，社会全体の課題である。2016年の合計特殊出生率は1.44であり（厚生労働省，2017），2005年の1.26から緩やかに回復傾向にあるが，依然として低い水準といえる。そのため，本邦では少子化対策は重要な課題であり，厚生労働省（2015）は「健やか親子21（第2次）」を提示し，安心して子どもを産み，健やかに育てる社会を目指している。その重点課題として，「育てにくさを感じる親に寄り添う支援」と「妊娠期からの児童虐待防止対策」を掲げている（厚生労働省，2015）。そして，子どもの健やかな発達において，親子の関係性に焦点づけた介入の重要性が指摘されている（北川，2013）。本研究では，幼児期の養育行動に着目した。

子どもの気になる行動

養育行動を読み解く上で，アタッチメントに注目した。アタッチメントとは，「危機的な状況に際して，あるいは潜在的な危機に備えて，特定の対象の近接を求め，またこれを維持しようとする個体（人間やその他の動物）の傾性」と定義される（Bowlby, 1969）。危機的な状況や潜在的な危機とは，恐れや不安といったネガティヴな情動状態である（数井・遠藤，2005）。子どものネガティヴな情動に対して，発達早期から子どもの言動の背景にある心の状態に焦点化した親のかかわりが，安定したアタッチメントを形成する。そして，子どもはそのやりとりを経験することによって，心の状態に思いをめぐらせる能力が発達する（Meins, 1997）。乳児期に形成されたアタッチメントスタイルは，外界を見る鋳型としての内的作業モデルとして機能し（Bowlby, 1973），安定したアタッチメントを形成した子どもは，欲求を素直に表現し伝えることができる。それに対して，不安定なアタッチメントを形成した子どもは，親との間でも対人関係の中でも，物を壊すといった乱暴な言動になったり他者とかかわりをもとうとしなかったり等の問題行動として現れてくる（本島，2012）。つまり，親の対応に合わせて子どもは行動を調整し，応答する親には素直に欲求を示すことができる。しかし，親が子どもの欲求に相対的に敏感でない場合には，子どもは過剰な表現に至ったり，欲求を表現しなかったりする。したがって，子どもの「問題行動」は，親との関係性の中で身につけた行動であるため，本研究では，子どもの「問題行動」を，親子関係の中で生じた子どもの欲求の表現型であると考え，子どもの「気になる行動」と捉えて検討した。

養育行動

安定したアタッチメント形成の考えからすれば，親が子どもの欲求に敏感に対応することが鍵となる。つまり，養育行動を検討する際，親が子どもの欲求に気づき，その欲求に応じた対応であるかを測定する尺度が必要であった。そのため，子どもの感情の推測に基づいた親の子どもへの対応という観点から養育行動尺度を開発したいと考えた。

従来の養育行動に関する尺度では，Schaefer（1965）はChildren's Reports of Parental Behavior Inventory（以下，CR-PBIと略す）を開発し，CR-PBIを分析した小嶋（1969）に検討を加えた鈴木・松田・永田・植村（1985）の親の養育態度尺度がある。鈴木他（1985）の親の養育態度尺度は，「子どもが怖がっているときには，安心させてやる」等の子どもの欲求に応じた親の対応の項目がある一方で，「子どもの悩みや心配ごとを理解している」「子どもにたびたび話しかける」等の親の主観的な表現や応答的もしくは干渉的であるか判断できないような内容も含まれていた。また，Baumrind（1967）は，応答性（子どもの意図・欲求に気づき，愛情ある言語や身体表現を用いて，子どもの意図をできる限り充足させようとする行動）と統制（子どもの意志とは関係なく，親が子どもにとって良いと思う行動を決定し，それを強制する行動）2つの軸から養育態度を分類した。Baumrind（1967）に基づいた中道・中澤（2003）の親の養育態度尺度は，応答性と統制それぞれの高低により，「権威的態度」「権威主義的態度」「許容的態度」の3つに分類された。これは，応答性の観点は含まれているものの，親の子どもへの具体的な対応による養育行動の測定が困難であった。

親が子どもに働きかける行動に注目した尺度では，ペアレントトレーニングの介入効果の測定にも使用される養育スキル尺度（三鉾・濱口，2010；立元・佐藤・坂田・岡安・佐藤，2001）がある。三鉾・濱口（2010）の養育スキル尺度は，「援助的コミュニケーション」「感情的な叱責の抑制」「不適切行動の無視」「物的報酬の賦与」「一時的なきげんとりの回避」「注目」の6つの下位尺度から構成された。「不適切行動の無視」は，「子どもが泣きさけんで自分の要求を通そうとしても，相手にしない」「子どもが注意を引こうとしてめそめそ泣いても取り合わない」等の項目で構成された。これは，親の応答的ではない対応であるのか，または，子どもの問題行動に取り合わないことで対処するスキルであるのか判断しにくい内容であった。

以上より，本研究において，子どもの感情の推測に基づいた親の対応を測定するためには，新たな尺度を検討する必要があった。

養育行動と子どもの自己制御の関係

次に，子どもの行動の特徴として自己制御に注目した。自己制御とは，自己主張・自己実現と自己抑制の両側面から構成される（柏木，1988）。自己主張・自己実現とは「自分の欲求や意志を明確にもち，これを他人や集団の前で表現し主張する，また行動として実現すること」とし，自己抑制とは「集団場面で自分の欲求や行動を抑制・

制止しなければならない時，それを抑制する行動のこと」と定義されている（柏木，1988）。首藤（1995）は自己制御と向社会行動との関連を示しており，自己制御の発達を促進する要因の検討がなされている。養育行動と自己制御との関連では，戸田（2006）は，過保護の養育行動が幼児の自己主張と思いやり行動を抑制することを示した。中道（2013）は，父親の許容的態度が男児の自己主張を抑制し，母親の権威主義的態度や許容的態度は子どもの自己抑制がきかなくなることを明らかにした。したがって，過保護や厳しく統制する養育行動は，幼児の自己制御の獲得を抑制することを示唆している。しかし，自己制御の発達を促進する養育行動について明らかにした研究はあまりなく，また親の精神的健康との関連も含めた検討はほとんど行われていない。

養育行動と子どもの行動及び親の精神的健康の関係

養育行動と子どもの行動及び親の精神的健康との関連では，三鉢・濱口（2010）は，母親の育児不安と養育スキル及び子どもの問題行動との関連を検討し，育児不安と養育スキルのそれぞれが子どもの問題行動に影響を与えるとするモデルを提示した。そして，育児不安と感情的に子どもを叱りつける行動や過度に子どもの機嫌をとる行動によって，子どもの反抗を促進することを示した。

従来，親の精神的健康と子どもの問題行動との関連では，親の抑うつが養育行動に影響し，子どもの問題行動に至るとする検討が多くみられた。しかし，因果関係の方向が親から子どもへの一方向だけではなく，子どもから親へも含めた相互影響関係を想定すべきとする複合的相互作用モデルの重要性も指摘されている（菅原，1997）。菅原他（1999）は，母親の子どもへの愛着感と外在化問題行動との関連を縦断的に検討した。そして，5 歳時で母親の否定的愛着感から 8 歳時の子どもの外在化問題行動へ影響し，さらに子どもの外在化問題行動が次の時期の母親の否定的愛着感へ影響を与えることを明らかにし，親子が相互に影響を与えていることを示した。Eisenberg et al.（2003，2005）は，親のポジティヴな表現と子どもの自己制御及び外在化問題行動との関連について，親子は相互に影響を及ぼすとしたモデルを検討している。本邦では，親子の相互影響関係を検討した研究は少なく，また養育行動が子どもの行動，さらに親の精神的健康に影響を与えるとするモデルを想定した研究はほとんどなされていない現状である。本研究では，養育行動が子どもの行動に影響を与え，さらに親の精神的健康に影響を与えるとするモデルを提示し，親子の相互影響関係を検討することを目的とした。

以上より，本研究の目的は，第一に，子どもの感情の推測に基づいた養育行動尺度を作成すること，第二に，養育行動が子どもの行動に影響を与え，さらに親の精神的健康に影響を与えていることを検証することである。

方　法

研究対象者

東京都の幼稚園 1 箇所，保育所 5 箇所に在籍する 2 歳から 6 歳までの幼児の保護者 392 名に無記名式質問紙調査が実施された。回収した 205 名（回収率 52.2%）のうち，幼児の年齢が 2 歳から 6 歳までではなかった場合，療育支援センター等に通所しているもしくは無記入だった場合は分析の対象外とし，最終的に有効回答者は 185 名（有効回答率 90.2%）であった。

年齢　19 歳以下の有効回答者が 1 名（0.5%），20 歳から 24 歳以下の有効回答者が 2 名（1.1%），25 歳から 29 歳以下の有効回答者が 8 名（4.3%），30 歳から 34 歳以下の有効回答者が 60 名（32.4%），35 歳から 39 歳以下の有効回答者が 61 名（33.0%），40 歳以上の有効回答者が 53 名（28.6%）であった。

続柄　母親の有効回答者が 173 名（93.5%），父親の有効回答者が 10 名（5.4%），叔母の有効回答者が 1 名（0.5%），無回答 1 名であった。

子どもの年齢　子どもの年齢が 2 歳の有効回答者が 19 名（10.3%），3 歳の有効回答者が 35 名（18.9%），4 歳の有効回答者が 43 名（23.2%），5 歳の有効回答者が 45 名（24.3%），6 歳の有効回答者が 25 名（13.5%），無回答 18 名であった。

子どもの性別　子どもの性別が男児の有効回答者が 92 名（49.7%），女児の有効回答者が 74 名（40.0%），無回答 19 名であった。

子どもの人数　子どもの人数が 1 人の有効回答者が 66 名（35.7%），2 人の有効回答者が 76 名（41.1%），3 人の有効回答者が 21 名（11.4%），4 人の有効回答者が 3 名（1.6%），無回答 19 名であった。

研究時期

2015 年 9 月上旬から 11 月上旬に実施した。

研究内容

フェイスシート　年齢，続柄，子どもの年齢，子どもの性別を尋ねた。

養育行動尺度　親の養育態度尺度（中道・中澤，2003；鈴木他，1985）及び養育スキル尺度（三鉆・濱口，2010；三鉆，2008；立元他，2001）の測定項目を参考にして25項目を作成した。養育行動尺度の作成にあたっては，子どもの感情の推測に基づいた対応と，そうではない対応を想定した。そして，親が理解しやすく，また，支援者が客観的に観察可能となる，子どもへの具体的な対応の内容になるように留意した。なお，参考にした測定項目において，親の主観的な表現や応答的もしくは干渉的であるか判断できないような内容には修正を加えた。その際，発達心理学を専門とする教員1名と発達心理学を専攻する大学院生1名により，項目内容の検討を行った。これらの項目は，「（想定した）お子様とあなたが普段接するとき，以下の対応がどの程度当てはまりますか？最も近い数字を〇で囲んで下さい」と教示し，4件法「全くそうではない(1)」「めったにそうではない(2)」「時々そうである（3)」「いつもそうである（4)」で回答を求めた。

1. 応答的な対応については，親の養育態度尺度（中道・中澤，2003；鈴木他，1985）の「応答性」と「受容」より，「子どもがイライラしていると思った時，『どうしたの』と聞いてみる」「子どもが怖がっているときには，安心させてやる」の項目を一部修正し用いた。さらに，養育スキル尺度（三鉆・濱口，2010；立元他，2001）の「援助的コミュニケーション」と「援助的な言葉かけ」より，「子どもが困っているときには，良い解決策を一緒に探す」「何が良かったのか子どもに伝えながらほめる」「子どもが間違った行動をした時，子どもと話し合い，理由を聞いたりする」の項目を一部修正し用いた。加えて，「子どもが自分の期待していた通りにできなくても，頑張りをほめる」「子どものできなかった面より，できた面を見つけてほめる」の項目は自己作成した。

2. 物的報酬については，養育スキル尺度（三鉆・濱口，2010；三鉆，2008）の「物的報酬の賦与」と「物的報酬」より，「子どもが良いことをしたら，ごほうびをあげる」「子どもが苦手なことに挑戦していたら，頑張ったごほうびを与える」「子どもが嫌なことでも頑張っていたら，ごほうびを与える」の項目を用いた。ごほうびの内容を，より物的報酬に特定できるように「ごほうびに物をあげる」と一部修正した。加えて，「ごほうびに何か買ってあげるから，頑張るように言う」の項目は自己作成した。

3. 罰による対応については，養育スキル尺度（三鉆，2008；立元他，2001）の「感情的叱責」と「罰」より，「子どもが悪いことをしたとき，自分の気分によって叱る程度が変わる」「子どもが間違った行動をした時には，大声でどなりちらす」「子どもが悪いことをしたら，たたく」「子どもに理由を説明するより，罰を与える方法でしつけている」「子どものしたことが気に入らない時，しばらくの間冷たくしたり，はねつけたりする」「悪いことをしたときには，テレビを見せないようにしたり，テレビゲームをさせないようにする」の項目を一部修正し用いた。

4. 一貫性のない対応については，親の養育態度尺度（鈴木他，1985）の「一貫性のないしつけ」より，「子どもが同じことをしても，時によって叱ったりほうっておいたりしてしまう」「その時の気分しだいで，子どもにきまりを押し通したり，ゆるめたりする」の項目を一部修正し用いた。さらに，養育スキル尺度（三鉆・濱口，2010；立元他，2001）の「一時的なきげんとりの回避」と「一貫性のないしつけ」より，「買い物をしているときに子どもが泣きさけぶと，つい好きなものを買ってあげる」「初めは『いけない』と言っても，子どもに粘られると最後には許してしまう」「子どもとのいざこざが面倒なときには，子どもの願いをかなえてあげる」の項目を一部修正し用いた。

5. 服従については，養育スキル尺度（立元他，2001）の「一貫性のないしつけ」より，「子どもが欲しがるだけおやつを与える」を用いた。加えて，「子どもが怒ると困るので，子どもの言う通りにする」「子どもに嫌われるのが心配で，子どもがするべきことをさせられない」の項目は自己作成した。

子どもの気になる行動を測定する尺度　日本語版Eyberg Child Behavior Inventory（以下，日本語版ECBIと略す：伊東，2015）36項目を5件法で回答を求めた。得点が高いほど子どもの気になる行動の頻度は高いことを示す。日本語版ECBI（伊東，2015）はEyberg子どもの行動評価尺度であり，その内容は，「自分のやり方が通らないと怒る」「おもちゃやその他の物を壊す」等の子どもの欲求を表現した行動で構成された。そのため，本研究では子どもの気になる行動を測定する変数として用いた。

子どもの自己制御を測定する尺度　幼児の自己制御機

能尺度（大内・長尾・櫻井，2008）の自己主張7項目，自己抑制6項目を5件法で回答を求めた。得点が高いほど各自己制御が高いことを示す。大内他（2008）は，柏木（1988）や首藤（1995）等の自己制御を測定する尺度を発展させ，自己主張では怒りのネガティヴな感情表出の内容は除き，親が理解しやすい表現や場面で構成した。そのため，本研究の子どもの自己制御を測定する変数として用いた。

親の育児感情を測定する尺度　育児への否定的・肯定的感情尺度（荒牧・無藤，2008）16項目を4件法で回答を求めた。得点が高いほど各育児感情が高いことを示す。育児感情は，育児への「負担感」「不安感」「肯定感」の3因子により構成され，さらに「不安感」は，親と子どものどちらに起因するかによって，「親の育て方への不安感」「子どもの育ちへの不安感」に分類された（荒牧・無藤，2008）。荒牧・無藤（2008）の尺度では，育児感情が否定的・肯定的の両側面から構成されており，本研究の親の育児感情を測定する変数として用いた。

親の抑うつを測定する尺度　日本語版エジンバラ産後うつ病調査票（Edinburgh Postnatal Depression Scale；以下日本語版EPDSと略す：岡野他，1996）10項目を4件法で回答を求めた。得点が高いほど抑うつ傾向は高いことを示す。日本語版EPDSは周産期の抑うつを測定するために世界で広く使用されている（Hewitt, Gilbody, Mann, & Brealey, 2010）。また，日本語版EPDSで問う項目は周産期に限定された内容ではないため，それ以外のライフステージにおいて使用できるとされている（Cox, Chapman, Murray, & Jones, 1996）。本邦でも，安藤他（2008）は，日本語版EPDSを用いて，幼稚園児の母親の育児感情と抑うつとの関連を検討し，幼児をもつ母親が，抑うつの好発期である周産期と同様に高い抑うつ得点であること，また，育児への否定的感情と抑うつには関係があることを示唆している。日本語版EPDSは，周産期や保健師の家庭訪問事業で広く使用されており，本研究の親の抑うつを測定する変数として用いた。

その他　養育行動と子どもの気になる行動及び自己制御の項目は，同一の幼児を想定して回答できるように，これらの設問の前に「ここからは，幼稚園・保育園に通園されているお子様についてうかがいます。お子様が複数いらっしゃる場合は，そのうちのお一人を思い浮かべてご回答下さい」と教示した。また，想定した子どもが発達への配慮が必要であるかを確認するために，療育支援センター等の機関への通室の有無について回答を求めた。これは軽度発達障害が早期に疑われる子どもをもつ親は，そうではない親よりも育児ストレスが高いことが明らかになっており（庄司，2007），親の精神的健康の影響を調査する上で，発達障害が疑われる子どもをもつ保護者を除いて検討する必要があったためである。

倫理的配慮

幼稚園・保育所に調査内容を記した質問紙と封筒の配布を依頼した。保護者が自宅に持ち帰り，本人が特定されぬように保護者が記入後封筒に入れ厳封の上，幼稚園・保育所で回収した。質問紙の表紙に，匿名性は維持されること，調査の協力は自由意思に基づき実施され，同意をしない場合でも不利益を受けることはないこと，質問紙への回答をもって調査の同意をしたことになること及び研究目的や調査に関する連絡先を記した。本研究は筑波大学人間系研究倫理委員会東京地区委員会の承認を得て実施された。

結　果

測定尺度

養育行動　自己作成した養育行動に関する25項目に対して，因子分析（最尤法，プロマックス回転）を行った。固有値の減衰状況と因子の解釈可能性から4因子を採用し，再度因子分析（最尤法，プロマックス回転）を行った。その結果，「ごほうびに何か買ってあげるから，頑張るように言う」の項目は，因子負荷量が.40に満たなかったため分析から除外し，再び因子分析（最尤法，プロマックス回転）を行った（Table 1）。その他の因子負荷量が.40に満たなかった項目に関しては，今後検討の必要があるが，養育行動として内容的に重要であると判断し，その後の分析に残した。

第1因子は「初めは『いけない』と言っても，子どもに粘られると最後には許す」「子どもが怒ると困るので，子どもの言う通りにする」等の項目に高い負荷量がみられた。この因子は，養育行動尺度を作成した段階では，「一貫性のないしつけ」と「服従」に分類した項目であった。これらの項目は，親が子どもから拒否されるのを恐れて萎縮し，子どもに必要な制限を加えることができない対応と解釈された。そこで「萎縮した対応」因子と命名された。第2因子は「子どもが困っているときに，どうしたらよいかを考える手助けをする」等の項目に高い

負荷量がみられた。これらの項目は，子どもの感情の推測に基づいた応答的な対応と解釈された。そこで「応答的な対応」因子と命名された。第3因子は「子どもが言うことをきかないとき，大声でどなる」等の項目に高い負荷量がみられた。これらの項目は，感情的に怒鳴ったり叩いたりして子どもに罰を与える対応と解釈された。

Table 1　養育行動の因子分析：回転後の因子負荷量と平均値及び標準偏差（最尤法・プロマックス回転）

	項　　目	F1	F2	F3	F4	*Mean*	*SD*
F1	萎縮した対応　　α=.76						
06.	初めは「いけない」と言っても，子どもに粘られると最後には許す。	**.66**	-.01	-.09	.11	2.17	0.76
11.	子どもが怒ると困るので，子どもの言う通りにする。	**.66**	-.08	-.27	.11	1.32	0.56
21.	子どもとのいざこざが面倒なときには，子どもの要求を我慢させずに許す。	**.61**	.05	.01	-.05	1.68	0.66
18.	子どもが欲しがるだけおやつを与える。	**.52**	.08	-.08	.10	1.70	0.77
03.	子どもに嫌われるのが心配で，子どもがするべきことをさせられない。	**.48**	-.10	-.13	-.00	1.20	0.45
20.	子どもが同じことをしても，ときによって叱ったり，許したりする。	**.46**	-.05	.22	-.04	1.83	0.74
07.	あなたはそのときの気分次第で，子どもに決まりを押し通したり，ゆるめたりする。	**.46**	-.07	.26	.03	2.12	0.69
14.	買い物をしているときに子どもが泣きさけぶと，つい好きなものを買ってあげる。	**.43**	.13	-.03	.10	1.64	0.78
F2	応答的な対応　　α=.77						
25.	子どもが困っているときに，どうしたらよいかを考える手助けをする。	.03	**.88**	.11	-.09	3.48	0.63
24.	子どもが自分の期待していた通りにできなくても，頑張りをほめる。	.12	**.75**	-.05	-.15	3.37	0.65
16.	何が良かったのか具体的に子どもに伝えながらほめる。	-.08	**.57**	-.03	.10	3.46	0.62
10.	子どもが怖がっているときに，安心できるように声をかける。	-.08	**.54**	-.02	.13	3.71	0.52
15.	子どものきげんが悪いとき，「どうしたの」と聞いてみる。	-.05	**.45**	-.05	.12	3.51	0.62
01.	子どもが言うことをきかないとき，子どもと話し合い，理由を聞く。	-.09	**.37**	-.04	-.05	3.26	0.59
12.	子どものできなかった面より，できた面を見つけてほめる。	.16	**.36**	-.20	.02	3.36	0.63
F3	罰による対応　　α=.69						
08.	子どもが言うことをきかないとき，大声でどなる。	-.17	.13	**.74**	.14	2.70	0.74
05.	子どもが悪いことをしたとき，自分の気分によって叱る程度が変わる。	.24	-.05	**.52**	-.15	2.46	0.72
13.	子どもが悪いことをしたら，たたく。	-.22	-.09	**.50**	.12	1.95	0.82
17.	子どもが言うことをきかないとき，理由を聞くより罰を与える方法でしつけをする。	.02	-.11	**.48**	.09	1.75	0.77
04.	子どものしたことが気に入らないとき，しばらくの間冷たくしたり，避けたりする。	.26	.01	**.45**	-.24	2.21	0.85
23.	悪いことをしたときには，テレビを見せないようにしたり，テレビゲームをさせないようにする。	-.13	-.08	**.42**	.04	2.18	0.92
F4	物的報酬による対応　　α=.84						
09.	子どもが苦手なことに挑戦したら，頑張ったごほうびに物をあげる。	.09	.10	.11	**.86**	2.39	0.75
19.	子どもが嫌なことに頑張っていたら，ごほうびに物をあげる。	.14	-.02	.18	**.75**	2.35	0.81
02.	子どもが良いことをしたら，ごほうびに物をあげる。	.05	-.05	-.06	**.67**	2.45	0.72

因子間相関	F1	F2	F3	F4
F2	-.26	—		
F3	.44	-.25	—	
F4	.23	.17	.17	—

そこで「罰による対応」因子と命名された。第4因子は「子どもが苦手なことに挑戦したら，頑張ったごほうびに物をあげる」等の項目に高い負荷量がみられた。これらの項目は，物的報酬を与える対応と解釈された。そこで「物的報酬による対応」因子と命名された。それぞれの養育行動尺度に該当する項目の得点を加算平均し，各尺度得点を算出した。各下位尺度の内的整合性を検討するために，Cronbachのα係数を算出したところ，第1因子α=.76，第2因子α=.77，第3因子α=.69，第4因子α=.84となり一定の信頼性がみられた。以上より，養育行動尺度は「応答的な対応」「物的報酬による対応」「罰による対応」「萎縮した対応」から構成された。

子どもの気になる行動　本来，日本語版 ECBI（伊東，2015）は，合計得点を分析に使用する尺度である。ECBI日本語版（伊東，2015）36項目において，内的整合性を検討するために，Cronbachのα係数を算出したところ，α=.91と高い信頼性がみられた。したがって，子どもの気になる行動尺度に該当する項目の合計を尺度得点として用いた。

子どもの自己制御　幼児の自己制御機能尺度（大内他，2008）の自己主張・自己抑制に関する13項目に対して，因子分析（最尤法，プロマックス回転）を行った（Table 2）。その結果，解釈可能性から2因子を抽出した。原論文（大内他，2008）と同様の下位尺度でまとまり，大内他（2008）にしたがって，第1因子「自己主張」，第2因子「自己抑制」とした。それぞれの自己制御尺度に該当する項目の得点を加算平均し，各尺度得点を算出した。各下位尺度の内的整合性を検討するために，Cronbachのα係数を算出したところ，第1因子α=.84，第2因子α=.69となり一定の信頼性がみられた。

親の育児感情　育児への否定的・肯定的感情尺度（荒牧・無藤，2008）16項目に対して，因子分析（主因子法，プロマックス回転）を行った（Table 3）。その結果，解釈可能性から4因子を抽出した。原論文（荒牧・無藤，2008）と同様の下位尺度でまとまり，荒牧・無藤（2008）にしたがって，第1因子「育児への負担感」，第2因子「育ちへの不安感」，第3因子「育て方への不安感」，第4因子「育児への肯定感」とした。それぞれの育児感情尺度に該当する項目の得点を加算平均し，各尺度得点を算出した。各下位尺度の内的整合性を検討するために，Cronbachのα係数を算出したところ，第1因子α=.80，第2因子α=.93，第3因子α=.77，第4因子α=.61となり一定の

Table 2　自己制御の因子分析：回転後の因子負荷量と平均値及び標準偏差（最尤法・プロマックス回転）

項　目	F1	F2	*Mean*	*SD*
F1　自己主張　α=.84				
04. 自分から友だちを誘って遊ぶことができる。	**.80**	.01	3.77	1.07
05. 周りと違う意見だったときでも，自分の意見を伝えることができる。	**.79**	-.10	3.59	1.00
01. 入りたい遊びに自分から「入れて」と言える。	**.78**	-.01	3.66	1.08
09. 遊びたいおもちゃを友だちが使っているとき「貸して」と言える。	**.66**	.10	3.78	1.00
11. 自分から進んで意見や考えを述べる。	**.62**	.07	3.66	1.04
08. 自分のしてほしいことを周囲の大人にはっきりと頼むことができる。	**.59**	-.07	3.83	1.03
07. 嫌なことや意地悪をされても「やめて」と言えない。(R)	**-.37**	-.01	2.12	1.07
F2　自己抑制　α=.69				
02. 遊具やおもちゃの順番を守って遊ぶことができる。	.08	**.68**	3.96	0.92
06. 指示に従えない。(R)	.10	**-.62**	2.41	1.02
03. 行ってはいけないと言われた所には近づかない。	.01	**.56**	3.67	1.03
12. お片づけを最後までやり通す。	-.05	**.51**	3.29	1.12
10. やりたい遊びができないとき，すぐに他の遊びに切り替えられる。	.07	**.42**	3.53	0.90
13. 欲しいおもちゃやおかしを買ってもらえないときに，それをあきらめることができない。(R)	-.00	**-.41**	2.51	1.21
因子間相関	F1	F2		
F2	.09	—		

注）(R) は逆転項目である。

Table 3　育児感情の因子分析：回転後の因子負荷量と平均値及び標準偏差（主因子法・プロマックス回転）

	項　　目	F1	F2	F3	F4	*Mean*	*SD*
F1	育児への負担感　　α=.80						
06.	子どもが，わずらわしくてイライラする。	**.85**	-.04	.00	.04	2.18	0.84
12.	子どもが自分の言うことを聞かないのでイライラする。	**.75**	.06	.05	.24	2.94	0.73
04.	子どもが汚したり，散らかしたりするので嫌になる。	**.62**	.07	.02	.14	2.79	0.78
02.	子どもに時間を取られて，自分のやりたいことができず，イライラする。	**.60**	-.10	-.00	-.05	2.81	0.74
11.	子どものことを考えるのが面倒になる。	**.47**	-.06	.10	-.23	1.58	0.72
07.	自分の子どもでも，かわいくないと感じる。	**.42**	.05	-.04	-.38	1.48	0.72
F2	育ちへの不安感　　α=.93						
13.	他の子どもと比べて，自分の子どもの発達が遅れているのではないかと不安になる。	.02	**.94**	-.01	.05	1.62	0.82
10.	自分が思っているように子どもが成長しないので成長が遅れているのではないかと不安になる。	.00	**.90**	.02	.01	1.63	0.77
05.	育児雑誌や育児書と比べて，自分の子どもの発達が遅れているのではないかと不安になる。	-.05	**.88**	-.02	-.06	1.72	0.84
F3	育て方への不安感　　α=.77						
03.	他のお母さんと比べて，自分の育て方でよいのかどうか不安になる。	.03	-.10	**.92**	.02	2.65	0.82
09.	テレビや雑誌・本，インターネットなどを見て，自分の育て方でよいのかどうか不安になる。	.02	.09	**.64**	-.01	2.24	0.82
15.	育児のことでどうしたらよいかわからなくなる。	.12	.11	**.47**	-.13	2.24	0.83
F4	育児への肯定感　　α=.61						
08.	子どもを育てることで自分も成長しているのだと感じる。	.21	.09	-.05	**.65**	3.37	0.78
16.	子どもを育てることは有意義ですばらしいことだと思う。	-.22	-.02	.14	**.55**	3.52	0.67
01.	子どもを育てるのは，楽しいと感じる。	-.23	-.03	.06	**.48**	3.67	0.56
14.	自分の子どもは，思うようにうまく育っていると感じる。	.20	-.10	-.18	**.47**	2.88	0.78

因子間相関	F1	F2	F3	F4
F2	.28	—		
F3	.38	.47	—	
F4	-.53	-.22	-.22	—

信頼性がみられた。

親の抑うつ　本来，日本語版 EPDS（岡野他，1996）は，合計得点を分析に使用する尺度である。日本語版 EPDS（岡野他，1996）10 項目において，内的整合性を検討するために，Cronbach の α 係数を算出したところ，α=.84 と高い信頼性がみられた。したがって，親の抑うつ尺度に該当する項目の合計を尺度得点として用いた。

属性による検討

母親と父親，子どもの性別の間で各変数の尺度得点の平均値に差があるか t 検定を行った。検定の結果，有意な差はみられなかった。

子どもの年齢と子どもの人数　大内他（2008）は年中児よりも年長児のほうが自己抑制は高いこと，荒牧・無藤（2008）は子どもが 1 人よりも 2 人以上いる場合，親の負担感が高い傾向にあることを明らかにしている。したがって，子どもの年齢と子どもの人数において，子どもの行動や親の育児感情との関連が指摘されており，子どもの年齢と子どもの人数の 2 変数を独立変数，各変数の尺度得点を従属変数とした二要因分散分析を行った。なお，子どもの人数は子ども 4 人の研究対象者が 3 名だったため，子ども 3 人と合わせて，子ども 1 人群，子ども 2 人群，子ども 3 人以上群の 3 群に分類した。分析の結果，有意な交互作用がみられたのは，「応答的な対応」（F（8，149）=2.44，p<.05）であった。交互作用が有意であったことから，単純主効果の検定を行った。その

結果，子どもの年齢が6歳における子どもの人数の単純主効果（F（2，149）＝4.80，p<.01）が有意であった。子どもの年齢が6歳の親において，子どもの人数によって「応答的な対応」に差があり，子ども1人群が子ども2人群，3人以上群に比べて「応答的な対応」の得点が高かった。

子どもの年齢　二要因分散分析の結果，子どもの年齢に主効果が認められたのは，「育ちへの不安感」（F（4，151）＝3.03，p<.05）であった。多重比較では有意な群間差は認められなかった。

子どもの人数　二要因分散分析の結果，子どもの人数に主効果が認められたのは，「罰による対応」（F（2，149）＝3.52，p<.05），「萎縮した対応」（F（2，149）＝3.26，p<.05），「気になる行動」（F（2，151）＝4.04，p<.05）であった。Tukey 法による多重比較の結果，子ども3人以上群が子ども1人群に比べて「罰による対応」の得点が高かった。また，子ども2人群，3人以上群が子ども1人群に比べて子どもの「気になる行動」の得点が高かった。

養育行動とその他の尺度との関連

養育行動と子どもの行動及び親の精神的健康の各尺度得点との間に相関係数を算出した（Table 4）。養育行動の下位尺度間相関では，「応答的な対応」は「罰による対応」（r＝-.309，p<.01），「萎縮した対応」（r＝-.215，p<.01）と弱い有意な負の相関があった。「物的報酬による対応」は，「罰による対応」（r＝.230，p<.01），「萎縮した対応」（r＝.343，p<.01）と弱い有意な正の相関があり，「罰による対応」は「萎縮した対応」（r＝.365，p<.01）と弱い有意な正の相関があることが明らかになった。

養育行動と子どもの行動及び親の精神的健康との関連

本研究は，養育行動が子どもの行動に影響を与え，さらに親の精神的健康に影響を与えると想定した。第1水準には養育行動を表す変数，第2水準には子どもの気になる行動の頻度及び自己制御を表す変数，第3水準には親の育児感情及び抑うつを表す変数を用いて，各水準より上位にある変数を説明変数とする重回帰分析（強制投入法）を行った（Figure 1）。

応答的な対応　「応答的な対応」は「育児への肯定感」（β＝.288，p<.001）に対して有意な正のパスが認められた。

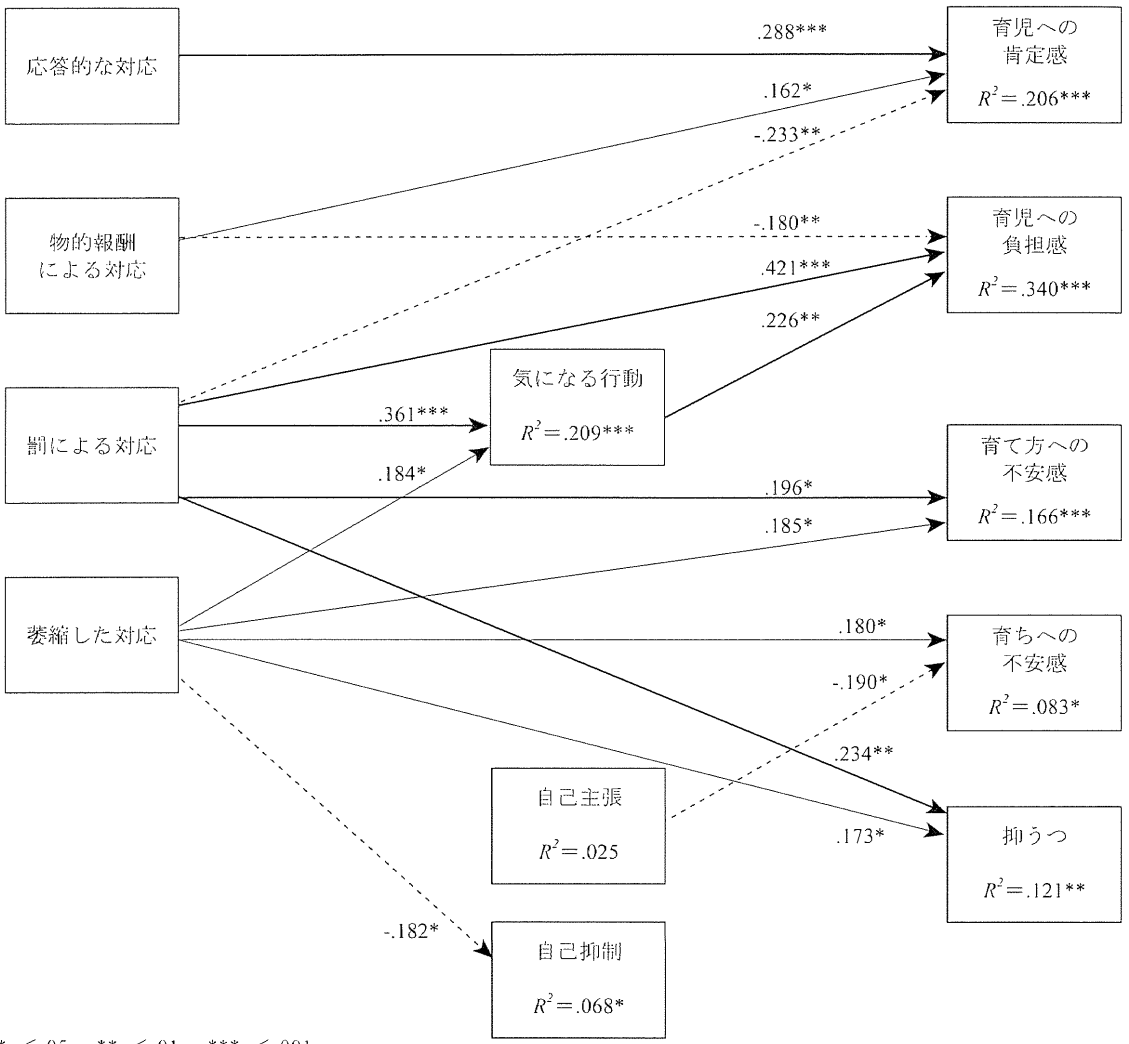
物的報酬による対応　「物的報酬による対応」は「育児への肯定感」（β＝.162，p<.05）に対して有意な正のパス，「育児への負担感」（β＝-.180，p<.01）に対して有意な負のパスが認められた。

罰による対応　「罰による対応」は「気になる行動」（β＝.361，p<.001）に対して有意な正のパス，「気になる行動」は「育児への負担感」（β＝.226，p<.01）に対して有意な正のパスが認められた。また，「罰による対応」は「育児への負担感」（β＝.421，p<.001），「育て方への不安感」（β＝.196，p<.05），「抑うつ」（β＝.234，p<.01）に対して有意な正のパス，「育児への肯定感」（β＝-.233，

Table 4　各変数間の相関係数

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L
A 応答的な対応	—											
B 物的報酬による対応	.074	—										
C 罰による対応	-.309**	.230**	—									
D 萎縮した対応	-.215**	.343**	.365**	—								
E 気になる行動	-.160*	.123	.425**	.310**	—							
F 自己主張	.074	.094	.098	.025	.079	—						
G 自己抑制	.136	-.084	-.171*	-.231**	-.515**	.096	—					
H 育児への肯定感	.372**	.155*	-.253**	-.038	-.098	.042	.153*	—				
I 育児への負担感	-.244**	-.046	.507**	.253**	.382**	-.041	-.154*	-.383**	—			
J 育て方への不安感	-.212**	.137	.321**	.315**	.228**	-.111	-.152*	-.248**	.416**	—		
K 育ちへの不安感	-.162*	.042	.128	.180*	.106	-.193**	-.110	-.212**	.249**	.451**	—	
L 抑うつ	-.124	.046	.265**	.215**	.126	-.112	-.040	-.392**	.367**	.446**	.377**	—

*p<.05，　**p<.01



*p<.05,　**p<.01,　***p<.001

Figure 1　養育行動が子どもの行動（気になる行動の頻度・自己制御）及び親の育児感情・抑うつに至るパスダイアグラム

p<.01）に対して有意な負のパスが認められた。

萎縮した対応　「萎縮した対応」は「気になる行動」（β=.184, p<.05）に対して有意な正のパス，「気になる行動」は「育児への負担感」（β=.226, p<.01）に対して有意な正のパスが認められた。さらに，「萎縮した対応」は「自己抑制」（β=-.182, p<.05）に対して有意な負のパス，「育て方への不安感」（β=.185, p<.05），「育ちへの不安感」（β=.180, p<.05），「抑うつ」（β=.173, p<.05）に対して有意な正のパスが認められた。その他，「自己主張」は「育ちへの不安感」（β=-.190, p<.05）に対して有意な負のパスが認められた。

考　察

養育行動尺度の検討

本研究の第一の目的は，子どもの感情の推測に基づいた養育行動尺度を作成することであった。養育行動に関する項目を作成し，因子分析により4因子を抽出した。各下位尺度の内的整合性を検討し4因子に一定の信頼性が認められた。その結果，養育行動は「応答的な対応」「物的報酬による対応」「罰による対応」「萎縮した対応」で構成されていた。因子間の関連を検討した結果，「応答的な対応」は「物的報酬による対応」と相関関係

になく，「罰による対応」「萎縮した対応」と弱い負の相関関係にあった。「物的報酬による対応」は「罰による対応」「萎縮した対応」と弱い正の相関関係にあり，「罰による対応」は「萎縮した対応」と弱い正の相関関係にあった。したがって，「物的報酬による対応」はネガティヴな対応と関連があることが明らかになり，「応答的な対応」とそれ以外の対応（「物的報酬による対応」「罰による対応」「萎縮した対応」）に養育行動が分類された。

養育行動と子どもの行動及び親の精神的健康との関連

本研究の第二の目的は，養育行動が子どもの行動に影響を与え，さらに親の精神的健康に影響を与えていることを検証することであった。本研究で作成した養育行動の分類が子どもの気になる行動の頻度と自己制御，及び親の育児感情と抑うつに与える影響について，重回帰分析を用いて検討した。

応答的な対応　重回帰分析の結果，「応答的な対応」が，育児への肯定感へ正の影響を与えていた。この結果から，「応答的な対応」の養育行動を増やすことは，育児への肯定感を高め，親の精神的健康が保持されることが示された。また，二要因分散分析の結果より，子どもの年齢が6歳の親では，子ども2人以上の親に比べて，子ども1人の親は「応答的な対応」の得点が高かった。荒牧・無藤（2008）は子どもが1人よりも2人以上いる場合，親の負担感が高い傾向にあることを示し，兄弟姉妹のけんかや育児への手間が親の負担感につながると指摘している。したがって，子どもが複数いる親は負担感を抱きやすく，「応答的な対応」の養育行動を増やすことで，育児への肯定感が高まり，親の精神的健康の保持に繋がるといえる。

物的報酬による対応　重回帰分析の結果，「物的報酬による対応」は，育児への負担感へ負の影響関係が，また，育児への肯定感へ正の影響が認められた。この結果からは，親の精神的健康にとって，「物的報酬による対応」の養育行動を増やすほうがよいといえる。一方，物的報酬を与えることで子どもが言うことをきくために育児負担感が低いとも解釈できる。Greene & Lepper（1974）は，物的報酬を介するやりとりが増えることは，子どもの自律性を下げることになると指摘している。親が子どものしたいことを率直に評価し，するべきことを繰り返し伝えたり，考えさせたりすることは，時に手間がかかることである。けれども，物的報酬を介するやりとりが増えることで，このような子どもとのやりとりが減った場合，長期的には親子関係や子どもの発達への否定的な結果が懸念される。また，親の育児への肯定感が高く，負担感が低い場合，親が苦痛を訴えることが少ないと推測され，早期に把握されず支援につながりにくいともいえる。「物的報酬による対応」の養育行動と子どもの行動との関連については，今後もさらなる検討が必要である。

罰による対応　重回帰分析の結果，「罰による対応」は，子どもの気になる行動の頻度を高め，親の育児への負担感を増やしていた。また，育児への肯定感へ負の影響，育児負担や不安，抑うつへ正の影響が認められた。これは，「罰による対応」の養育行動が増えると，子どもは親に率直に欲求を伝えられず，その代わりに問題と捉えられるような行動で親に訴えるようになる。親から見ると子どもの気になる行動の頻度が増えることで，さらに親の育児負担や不安，抑うつが高くなる。そして，二要因分散分析の結果より，子ども1人の親に比べて，子ども3人以上の親は「罰による対応」の得点が高く，また，子ども2人以上の親は子どもの「気になる行動」の頻度が高かった。これは，子どもが複数いる親は，「罰による対応」の養育行動が増え，子どもの気になる行動の頻度が高くなる。その結果，親の精神的健康に影響を与えるといえる。したがって，子どもの発達と親の精神的健康において，「罰による対応」の養育行動を減らすことが重要であり，子どもが複数いる親は，「罰による対応」の養育行動をとる可能性に注目し，早期からの継続した支援が必要である。

萎縮した対応　重回帰分析の結果，「萎縮した対応」は，子どもの気になる行動の頻度を高め，育児への負担感を増やすことに影響していた。そして，子どもの自己抑制へ負の影響を与え，また，親の育児不安や抑うつへ正の影響を与えていた。これは，「萎縮した対応」の養育行動が増えると，子どもの行動を止めたり注意したり，必要な制限を加えることができず，子どもは気になる行動や自己制御がきかなくなる形で現すようになる。そして，親の育児負担や不安，抑うつはさらに高くなる。「萎縮した対応」に至る背景には，親が子どもから拒否されるのを恐れて萎縮し，子どもに必要な制限を加えることができない状態と推測された。

Powell, Cooper, Hoffman, & Marvin（2014）は，親が子どもの欲求に応答しにくいとき，親自身のネガティヴなアタッチメント経験によって，確立された恐怖に対する

長年にわたる防衛が関係していると述べている。「罰による対応」「萎縮した対応」の養育行動は，こうした親の防衛的な反応の現れであるともいえる。加えて，支援者が親の防衛の背後にある不安に寄り添い，親が支援者と安心できる関係を経験することで，親は次第に防衛を必要としなくなる。そして，親は自身の不安に向き合い，子どものために防衛を乗り越えてみることができる。そのための親子の関係性に焦点づけた評価と援助のプログラムの実践が始まっている（北川，2012，2013）。

以上より，本研究において，養育行動が子どもの行動に影響を与え，さらに親の精神的健康に影響を与えることが支持された。これは，子どもの健やかな発達にとって，また親の精神的健康にとっても，親子の関係性にアプローチすることが有効であることを示す結果であった。そして，親が子どもの欲求に応答しにくい場合，親の防衛的な反応の現れであることも推測され，親自身の調整されない感情に寄り添い，親子の相互影響関係に注目した支援が求められている。

本研究の限界と今後の課題

本研究では，養育行動が「応答的な対応」「物的報酬による対応」「罰による対応」「萎縮した対応」で構成された。「物的報酬による対応」は，ネガティヴな養育行動と関連があったが，親の精神的健康にとっては増やすほうがよい対応という結果であった。しかし，本研究は一時点の横断的研究であるため，乳幼児期では育児への負担感を下げても，長期的な親の精神的健康への影響は確認できていない。さらに，「物的報酬による対応」の項目は，肯定的な場面への報酬のみで構成されていたため，否定的な場面への方略（子どもが親の要求に応えられなかったら，報酬をあげない等）の検討がなされていなかった。本研究では，「物的報酬による対応」の養育行動と子どもの行動との関連は明らかにできなかったため，今後は養育行動尺度のさらなる検討に加え，縦断的な調査で明らかにしていく必要がある。

本研究の結果より，子どもの行動にとって，「罰による対応」「萎縮した対応」の養育行動がよくない影響を与えていることが支持された。一方，子どもの気になる行動を減らし，自己制御の発達を促進させる養育行動については明らかにできなかった。そこで，今後は，親子のアタッチメントの変数を加えて，養育行動と子どもの行動との関連を検討することで，より親子の関係性に注目した影響を明らかにしていきたいと考えている。

引用文献

安藤智子・荒牧美佐子・岩藤裕美・丹羽さがの・砂上史子・堀越紀香（2008）．幼稚園児の母親の育児感情と抑うつ－子育て支援利用との関係－　保育学研究，*46*, 235-244.

荒牧美佐子・無藤　隆（2008）．育児への負担感・不安感・肯定感とその関連要因の違い－未就学児を持つ母親を対象に－　発達心理学研究，*19*, 87-97.

Baumrind, D. (1967). Child care practices anteceding three patterns of preschool behavior. *Genetic Psychology Monographs, 75*, 43-88.

Bowlby, J. (1969). *Attachment and loss: Vol.I Attachment*. New York: Basic Books.

Bowlby, J.(1973). *Attachment and loss: Vol. II Separation anxiety and anger*. New York: Basic Books.

Cox, J. L., Chapman, G., Murray, D., & Jones, P. (1996). Validation of the Edinburgh postnatal depression scale (EPDS) in non-postnatal women. *Journal of Affective Disorders*, *39*, 185-189.

Eisenberg, N., Zhou, Q., Losoya, S. H., Fabes, R. A., Shepard, S. A., Murphy, B. C., ...Cumberland, A. (2003). The relations of parenting, effortfulcontrol, and ego control to children's emotional expressivity. *Child Development, 74*, 875-895.

Eisenberg, N., Zhou, Q., Spinrad, T. L., Valiente, C., Fabes, R. A., & Liew, J. (2005). Relations among positive parenting, children's effortful control, and externalizing problems: A three-wave longitudinal study. *Child Development, 76*, 1055- 1071.

Greene, D., & Lepper, M. R. (1974). Effects of extrinsic rewards on children's subsequent intrinsic interest. *Child Development, 45*, 1141-1145.

Hewitt, C. E., Gilbody, S. M., Mann, R., & Brealey, S. (2010). Instruments to identify post-natal depression: Which methods have been the most extensively validated, in what setting and in which language? *International Journal of Psychiatry in Clinical Practice, 14*, 72-76.

伊東史ユ（2015）．日本における ECBI（Eyberg Child Behavior Inventory）の標準化研究　山梨大学博士学

位論文（未公刊）
柏木恵子（1988）．幼児期における「自己」の発達－行動の自己制御機能を中心に－　東京大学出版会
数井みゆき・遠藤利彦（編）（2005）．アタッチメント－生涯にわたる絆－　ミネルヴァ書房
北川　恵（2012）．親子の関係性に焦点づけた評価と援助を提供するプログラム－The Circle of Security プログラムの特徴と実践－　子どもの虐待とネグレクト，*14*, 153-161.
北川　恵（2013）．アタッチメント理論に基づく親子関係支援の基礎と臨床の橋渡し　発達心理学研究，*24*, 439-448.
小嶋秀夫（1969）．親の行動の質問紙の項目水準におけるバッテリー間因子分析　金沢大学教育学部紀要，*18*, 55-70.
厚生労働省（2015）．健やか親子 21（第 2 次）Retrieved from http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000067539.pdf（2017 年 9 月 20 日）
厚生労働省（2017）．平成 28 年人口動態統計月報年計 Retrieved from http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/kakutei16/dl/tfr.pdf（2017 年 9 月 20 日）
Meins, E. (1997). *Security of attachment and the social development of cognition*. Hove, East Sussex: Psychology Press.
本島優子（2012）．乳児期の子どものアタッチメント安定性と幼児期の社会情動コンピテンス－縦断的検討－　発達研究，*26*, 141-148.
中道圭人（2013）．父親・母親の養育態度が幼児の自己制御に及ぼす影響　静岡大学教育学部研究報告（人文・社会・自然科学篇），*63*, 109-121.
中道圭人・中澤　潤（2003）．父親・母親の養育態度と幼児の攻撃行動との関連　千葉大学教育学部研究紀要，*51*, 173-179.
大内晶子・長尾仁美・櫻井茂男（2008）．幼児の自己制御機能尺度の検討－社会的スキル・問題行動との関係を中心に－　教育心理学研究，*56*, 414-425.
岡野禎治・村田真理子・増地聡子・玉木領司・野村純一・宮岡　等・北村俊則（1996）．日本版エジンバラ産後うつ病自己評価票（EPDS）の信頼性と妥当性　精神科診断学，*7*, 525-533.
Powell, B., Cooper, G., Hoffman, K., & Marvin, B. (2014). *The circle of security intervention: Enhancing attachment in early parent-child relationships*. New York: Guilford Press.
三鉾泰代（2008）．幼児期の子どもをもつ親の養育スキルに関する研究－親の養育スキルと子どもの行動傾向との関連－（中間報告）　発達研究，*22*, 181-189.
三鉾泰代・濱口佳和（2010）．幼児期の子どもをもつ母親の育児不安と養育スキルおよび子どもの問題行動との関連　子どもの虐待とネグレクト，*12*, 250-260.
Schaefer, E.S. (1965). Children's reports of parental behavior: An inventory. *Child Development, 36*, 413-424.
庄司妃佐（2007）．軽度発達障害が早期に疑われる子どもをもつ親の育児不安調査　発達障害研究，*29*, 349-358.
首藤敏元（1995）．幼児の向社会的行動と自己主張－自己抑制　日本性格心理学会大会発表論文集，*4*, 88-89.
菅原ますみ（1997）．養育者の精神的健康と子どものパーソナリティの発達－母親の抑うつに関して－　性格心理学研究，*5*, 38-55.
菅原ますみ・北村俊則・戸田まり・島　悟・佐藤達哉・向井隆代（1999）．子どもの問題行動の発達　－Externalizing な問題傾向に関する生後 11 年間の縦断研究から－　発達心理学研究，*10*, 32-45.
鈴木眞雄・松田　惺・永田忠夫・植村勝彦（1985）．子どものパーソナリティ発達に影響を及ぼす養育態度・家庭環境・社会的ストレスに関する測定尺度構成　愛知教育大学研究報告（教育科学編），*34*, 139-152.
立元　真・佐藤容子・坂田和子・岡安孝弘・佐藤正二（2001）．幼児の母親の養育スキルに関する研究（1）－養育スキル尺度の作成－　日本教育心理学会総会発表論文集，*43*, 519.
戸田須恵子（2006）．母親の養育態度と幼児の自己制御機能及び社会的行動との関係について　釧路論集－北海道教育大学釧路校研究紀要－，*38*, 59-69.

謝　辞

本研究の実施にあたり，多大なるご協力をして下さいました幼稚園・保育所の先生方，保護者の皆様には感謝の念にたえません。本当にありがとうございました。また，ご指導ご鞭撻を賜りました先生方，丁寧にご指摘下さいました査読者の先生方にも心より感謝申し上げます。